

『決して切れない絆の糸』



博士論文作成のため、一人孤独な作業を続けていた 2005 年の冬、私の中で気持ちを分かち合えるワンちゃんと暮らしたいという思いが募っていた。良い出会いを探していたところ、友人を介して知り合った方から、飼っているトイプードルに子どもが生まれたので、良かったら貰ってくれないかとの連絡が入った。早速、その家に出向くと、まだ目も開いていない一匹の子犬がいた。

手足をプルプルと震わせながら、あくびをしている姿を見た時、頭に雷がおちたように「この子しかいない！」という感情が湧き上がり、私は譲っていただくことを即決した。それから用事を見つけては、その家に向かい、名前も「ココ」と決めた。

そして、ある春の日、ついにココちゃんが私の元にやって来た。当

日、家の前で記念に撮った写真の中には、親から離れ不安そうな目のココちゃんがいる。今の私を頼りきっている姿からは、想像もできないけれど、それが月日の流れというものなのだろう。

その後しばらくして、私はココちゃんと共に日本を離れ、両親が暮らしていたアメリカに渡った。当時の私は、不慣れな土地で研究者への道を模索し、心身共に疲れきる毎日を送っていた。しかし、家に戻れば、私の足音を聞きつけたココちゃんが、いつも玄関のドアを引っ掻いて会いたい気持ちを表してくれる。悲しみの淵に立たされ、部屋で一人涙した時には、私を心配そうに見つめながら、頬をつたう涙を舐めてくれた。私たちは、そうして一心同体になっていった。

そんな思いが、確信に変わった日がある。私は朝から大量の仕事を抱え、一日中机に向かわざるを得なかった。散歩にも行けなかったこともあって、ココちゃんが退屈だろうと思った両親は、趣味のハイキングに連れ出してくれた。車で1時間ぐらいの山に行った両親は、いつもリードをつけられて窮屈なはずと、ココちゃんを放してみた。すると、お利口そうに自分たちの後をトコトコ付いて来るので、両親は安心してふと目を離したところ、ココちゃんが見当たらなくなってし

まった。いくら大声で叫んでも、登山道を歩く人に声を掛けても見つからず、両親は真っ青な顔をして夜更けに帰ってきた。

その晩、家中がまさにお通夜のような状態で、ため息だけがその場を支配していた。気温も氷点下まで下がり、「風邪を引くことも多いココちゃんは、どんなに辛い夜を過ごしているのだろう」と、家族皆が胸を刺すような痛みを抱え続けていた。その空気に耐え切れなかった父が煙草を吸いに外に出てみると、何と玄関先にココちゃんがいた。

父が余りに大きな声で「ココ！」と叫んだので、何事かと玄関に向かうと、ホコリだらけで毛並みもボサボサになったココちゃんが見えた。初めて行く何十キロも離れた山の中から、どうやって半日足らずで家にまで戻ってきたのだろう。当時の住まいはワシントンD.C.近郊で、車の行き来も多く、本当にあり得ない様な状況だった。ただ、ココちゃんはいつもの様に、玄関からスルリと家に入ると、涙を流して抱き寄せようとする私の足元に転がって、お腹を撫でて欲しいとねだるのだった。映画のような出来事だったけれど、ココちゃんからすれば、遠くの山で私が居ないことに気づいて、何とか戻ろうとしただけだったのかもしれない。私が居ないと何としてでも会いに来ようとする

る思いの深さ、家にたどり着く聡明さ、意志の強さを目の当たりにした時、私にはココちゃんと自分とを繋ぐ絆の糸が見えた。

ただ、そんなココちゃんは今、韓国に戻った両親の元で暮らしている。私の多忙さを心配した両親は、頑として自分たちが引き取ると言っ
て聞かなかったのである。私は毎日、母と話す時、その日のココちゃんの様子を聞くのが常なのだけれど、大抵、玄関前の石の床の上で1,2ヶ月に一度里帰りする私のことを待っているという。老犬の域に入りながら、そんな健気な様子を見せていることを聞く度、私の心は海を越えてココちゃんへと繋がり、私たちに残された時間をどう過ごすべきかに思いを馳せる。

私たちは離れてはいけない。ココちゃんを再び自分の元に迎えらる様に、私は今日も走り続ける。



国際法学者 金惠京

金惠京